人の成長について

代表取締役　鈴木英介

前号で最後は人の成長の話になってしまった。

本屋へ行けば自己啓発本のコーナーがある。今、自己啓発は大はやりだ。以前ここで「自己啓発本は読んではいけない」などと書いた事がある(№190)。そもそも私は自己啓発本を読まないし、自分の成長などもあまり考えたことはない。なぜなら「成長」と言うからには「東へ行けば成長、西へ行けば退行」とか「右へ行けば是、左へ行けば非」と言うように、何らかの方向、基準があるはずだ。闇雲にがんばれという事ではないだろう。

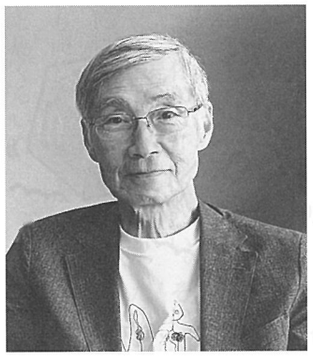
外見的な事であれば、身長が何センチ伸びたとか体重が何キロになったとか基準がある。学校であればテストで何点を取ったかと数値がある。人の成長と言う場合、こう言う事ではないと思う。

とは言っても、成長がないわけではない。何を成長と考えるかが問題だ。これを抜きに成長を語ることはできない。もし方向性がないのなら、見当違いの努力をすることになる。私はそうはしたくないと思っている。昔であれば偉人、賢人のモデルがあった。現代で若者が○○氏のようになりたいと思っているのだろうか。少なくとも私の場合目標とする人はいなかった。目標もなく、進むべき方向もわからず、若者に「努力しろ」とは言えない。一体どっちに行ったら良いのかと問い返されるだろう。

私ごとで言えば、そんな事はあまり考えず、その時やりたい事をやり、興味のある本を読んできたように思う。だから読書も系統だってはいない。乱読といってよい。少年期ではロシア文学などを読んでいた。そのころ同世代では流行っていたと思う。高校では西遊記、水滸伝、三国志演義、聊斎志異など中国の古典、西洋ではイーリアス、オディセア、指輪物語やゲド戦記で「血沸き肉躍る」系を楽しく読んでいた。

社会に出てからは必要に迫られ様々な本を読んだ。人よりも読書量は多いと思うが、この事で人間的に成長したとは思えない。でも知識は増えたので人生の役には立ってはいる。私は大人になってからは、実際に役に立つ本を読んでいる。

例えば不動産業にいたときは宅建を取るため、法律を学んだ。清掃の仕事の為、化学と微生物学の本も読んだ。経営者になったから経済学の本を読んだ。いつも「泥縄式」なのである。またそうでなければ学ぶ気がしない。今は何を読んでいるかというとアドラーの心理学を読んでいる。



それでは人の成長とはなんだろうか。前号では「できることを積み上げ、成功体験を積むこと」と書いた。成功すれば次からは同じことが早くできる。失敗すればできないし、次に進めない。これを私は登山経験から学んだ。

岩壁や雪壁では体力と技術力、瞬時の判断力が必要だ。成功を積み重ねることで難しい場所も登れるようになる。反対に失敗ではそれ以上一歩も進めない。あきらめて別のルートを取るしかない。この成功は精神的な自信ではない。登る技量があるかどうかだ。経験とはそういう事だと思う。

反対に失敗体験では何も残らない。だからむやみに難しい事に挑戦して失敗するより、できる仕事を積み重ねる事を勧める。新しい事は少しだけ増やせば良い。そこの加減をするためには自分自身の力を知っている必要がある。無理なら引き返せばよい。山での失敗は死だ。失敗しなければ次がある。

次に会社での成功とはなんだろうか。売り上げを上げること。利益を上げること。いやいやそれだけではないだろう。

会社運営に役立つのではないかとの考えからだ。本当のところはユングの心理学のほうがしっくりくるのだが、アドラーのほうが実務上役に立ちそうだ。知らなかったことを知る事は成長のひとつだが、それだけではないだろう。

これも会社を大海原に浮かぶ一つの船と考えると、沈まず航海することが第一だ。船が沈んでしまえば乗組員は死んでしまう。船は生産手段ではあるが乗組員にとっては生活の場だ。船が大きければ大きいほど、大勢の乗組員がいて様々な仕事がある。その中には船が水に浮かぶ事にも、前に進むことにも直接関係のない仕事も多い。実際、船はどんどん大きくなる。それは経済的な合理性のためだ。

現代の仕事は皆、会社での組織的生産活動である。

すこし前までは仕事は個人がするものだった。農民が作物を作り市場で売る。鍛冶屋は農具を作り農民に売る。大工は人々の家を建てる。様々なものを売る商人も個人経営か家族経営だ。この時代、仕事と人の生き方は分かりやすかった。農民は農民らしく、職人は職人らしく、商人は商人らしくというものがあった。

現代の若者が何をしたらよいかわからないのは、仕事と生き方が結び付かないからだ。会社で仕事をしなければ生きていけない。それにもかかわらず会社では何をするのかがわからない。何でもでき、何でもする人材を会社は求める。そして全体の為の部品であることが求められる。しかし社員は生身の人間で機械ではない。そもそも会社全体でどこに向っているのかわからなければ協力もできない。

当社では仕事に対して人を雇用する。部品化した会社員を雇用して仕事を割り振るわけではない。その仕事をしたい人を募集する。そして大勢の違う職種の人が乗り組んでいるのが会社だ。それが沈まないように皆で協力する。自分の役割が解ってこそ協力が生まれる。